



# 卓 話



## 「白洲次郎 占領を背負った男」

作家・中央大学専門職大学院客員教授

北 康利氏

兵庫県三田市で坂本会長に名刺をいただき講演の依頼をいただいた時、大変驚いたのですが、父が坂本会長と同じ三田学園の出身ということで、引き受けさせて頂きました。



私は富士銀行に入ってから、みずほ証券で仕事をしておりましたが、1998年に父が他界した事をきっかけに本を執筆し始めました。父親が65歳で亡くなる事とはどこにでもある話ですが、癌で3ヶ月入院した後にはぼっくりいってしまったのが、自分としては心に穴があいた思いでした。残された時間を、父が失った分まで有効に活用しようと思いたち、土・日曜を使って本を書き始めました。

文庫本というのは発刊の日が大体決まっていますので、父の命日にはしなかったのですが、「白洲次郎 占領を背負った男」の単行本発刊日は8月2日の命日に合わせて本を出しました。私がこのように作家になれたのも、単行本、文庫本とあわせて41万部出たのも、自分の父が背中を押してくれたのではないかと考えている次第です。

NHKで9月21日から3夜連続のドラマをやらせて頂きます。吉田茂役の原田芳雄氏が入院されたり、経済的な問題等により、期をまたいで放映せざるを得なくなり、当初、8月20日の予定だったのですが、選挙の政権放送の為にさらに放映日が伸びる事になり、すっかり前作から間が開いてしまいました。大変難産ではありましたが、ようやく皆さんにお届け出来る事になり、その放映前の露払いという事で「その時歴史は動いた」という番組で白洲次郎が取り上げられ、それからドラマが放映されるという予定です。

2日前位に、ドラマの試写会に行き、伊勢谷君に良かったとねぎらい、一緒に写真に収まってきました。伊勢谷君は本当に格好良く、白洲次郎役に適役であると思いました。彼に白洲次郎をやってもらったことにより、彼自身もブレイクし、ステップアップにつながったと思います。又三田市の町興しになり、若い人達に元気や勇気を与えたという事で、色々な面で良いきっかけとなったのではないかと思います。

今日は白洲次郎を通じて私が伝えようとした事をお話したいと思います。本を書く時、私は副題に色々な思いを込

める事にしています。白洲次郎は「占領を背負った男」、福沢諭吉の場合は「国を支えて、国を頼らず」、またPHP新書で出した「匠の国日本」では「職人は国の宝、国の礎」、吉田茂は「ポピュリズムに背を向けて」といったように、副題は心を込めて付けているつもりです。

戦争の悲惨さというものを書いた本はたくさんあります。最近、若者の間では絶対戦争反対、武器など持つべきではない、憲法9条があるではないかと言う人が多いのもその為かと思われます。しかし占領された時の屈辱、独立を持っていない国の悲惨さを描いた本が少ないのです。日本国憲法の制定過程も、私は法学部であったにも関わらず、今回初めてこのような作られ方をしていたのかと知り、そういう事を若い人達に伝えたいと思ったのが、この本を書いたきっかけの一つでした。

それからもう一つお伝えしたかった事があります。白洲次郎はプリンシプルな男と言われています。私はロータリークラブも比較的プリンシプルを大切にしているグループだと思いますが、似た言葉でディプリシプリルという言葉があります。これは中学の生徒手帳等に書かれている校則のようなルールを表している言葉です。しかしプリンシプルは上から与えられるものではなく、自分の頭で考え、こういう生き方ではないと自分は美しくないという「筋」を持っています。白洲次郎の言葉を借りますと「武士の一分」、私自身は人間が生きる上の美学と訳していますが、そういうものを持っている人間がいかに強いかということをお伝えしたいと思います。

今100年に一度の危機ということで騒がれていますが、吉田茂や白洲次郎は建国以来2000年の危機に敢然と立ち向かっていった人達です。100年に一度の危機でふらふらしている場合ではありません。2000年に一度の危機に際しても、自分はこうやって生きるのが美しいと思うという筋のある人間は動揺しません。こうした強い男の秘密について白洲次郎を通して語ってみたいと思ったのです。

先程申しました通り、私も坂本会長同様三田の出身で、誰かがいないかと思った時に、白洲次郎の墓も三田にあるという関係で、彼を通して三田という地域を知ってもらう意味もありました。

テレビを見てみると、政治が悪い、国が悪い、学校が悪い、先生が悪い、と誰々が悪いというような事を言ってます。しかし上がどうこうで下がぶれるのではなく、1人1人がしっかりしていればその集合である家族もしっかりするし、集合体の学校もしっかりする。もっと大きく言えば国もしっかりするという事が言えるのではないのでしょうか。テレビの画面越しに「貴方がしっかりしなくてはならな

い」というキャスターはいないでしょう。そうした意味では白洲次郎のような人に復活してもらい、やはり自分達が頑張らなくてはならないのだという事を、もう1度認識してもらいたかったのです。

本当に白洲次郎は格好良い。しかし彼はルックスだけでなく、生き方も格好良いのです。最近若い人達が誤解し、白洲次郎のように生きるのだと大学出たてで会社勤めを嫌い、一旗揚げてやろうという人がいます。しかし私は「衣食足りて礼節を知る」という中国で言われている言葉はある意味、真理をついていると思っています。ある程度の経済基盤がないと一本筋の通った生き方は難しい。また経済的な基盤だけではなく、私はこれが強いのだ、というものがないとぶれずに生きていく事が出来ません。白洲の場合、幸運な事に豊かな家庭に生まれ、経済的な基盤はクリアしていました。又それ以外に英語が出来る、ルックスが良い、押し出しが強い等の長所を持っていたのです。さらにそれだけではなく、彼は日本水産で貿易を学んでビジネスマンとしての基礎がありました。ここで坊ちゃんが縁故採用で入社したのだらうと思う人もいるようですが、彼は入ってすぐに会社始まって以来の大きな取引をやっていきます。確かに牧野伸顕、樺山愛輔等の有力者との人脈が背景にあったかもしれませんが、彼はビジネスというものを知っていました。

政治の世界、官の世界が煮詰まってきた時に必ず民間の知恵を借りるという事が出てきます。戦後に西郷隆盛の銅像から東京湾が一望できる程、焼け野原になって何もなくなってしまう時に、白洲や吉田は思います。何もなくなってしまうが、一つだけ残っている。それはパンドラの箱にただ一つ残された希望のように、日本人が残っているという事でした。今は貧乏で、しらみがたかり、真っ黒になっているかもしれないが、勤勉で教育レベルが高く、手先が器用な日本人が残っている事に希望を持ったのです。白洲はビジネスの経験から、日本には資源がないが資源を輸入して加工し、バリューアップして輸出するというようなビジネスモデルが日本復興の一番の鍵となるという事を分かっていました。日本水産で鯨を取って油を絞る、或は鮭を採って缶詰にして儲けるというような経験をから、加工貿易が大変なチャンス運ぶものであるという事を知っていたのです。ところが商工省がその時は強い役所として存在して内需拡大に目を向けており、余り貿易という観点がありませんでした。そこで白洲は商工省を潰して、外務省の一部の一つにして通産省をつくり、大成功をおさめます。その後、加工貿易を動かす為には電力が必要だという事で東北電力の会長となり、只見川のダム発電の先頭に立って指揮を執りました。まさに民間の知恵です。要するに戦争で何も失ったが、確固たるものを持ってさえいれば民間の手で結果を出せるという事を、私は当時の白洲や吉田から学べると思ったのです。例えば、吉田だったら外交ですが、他の人なら英語、あるいは商売かもしれない。そういうもの持っていれば、日本の2000年に1度の危機でもあたふたしないのだという事で、今の日本人の胸を打

つものがあるのではないかと思ったのです。

その後、福沢諭吉の評伝を私は書いて知ったのですが、実は福沢は白洲の祖父と非常に仲が良かったようです。ですから白洲家のプリンシプルの中には独立自尊が生きているのだと思いました。独立自尊はプリンシプルの日本版と言えます。福沢諭吉は明治政府が植民地化されるかどうかの瀬戸際に立った時、どうやってそれを避け、一流の国家として成り立つ為に何をすべきかを説きました。彼は学者でしたが、白洲次郎と同様に理論だけでなく、実務を分かっていた人でした。商業に何が必要かといった時、簿記を主張したのです。この発想はすごいと思います。学者で商売をやるという時にそろばんが必要だという位の事は言う人はあると思います。しかし複式簿記がないとしっかりとしたベースとしてのキャッシュフローが押さえられないという事を福沢諭吉は主張しました。福沢のこうした考え方が白洲には流れていると思います。もう一つ、福沢は独立自尊、つまり個人が人に頼らずに確固たるものを持つことが、明治国家には必要だと説きました。農民の年貢によって生きていた貴族、士族にこれからは自らの力で生計を立てるべきであると商業を推奨します。さらに福沢は一本立ちする為には動じてはいけないと、明治生命、東京海上等の損保をつくることにより、転ばぬ先の杖を用意するのです。口先だけではなく、一本筋を通す為には何が必要かという事を説いていたのです。そういう考え方を白洲は祖父から教わり、自分もこういった生き方をしなくては行けないという事が分っていました。

私は評伝を書く事をライフワークにしようと思っています。外国に行くのと図書館にものすごく多くの評伝がある事に驚かされます。日本は伝記、評伝の類が戦後圧倒的に少なくなってしまう。これは何故か。戦争に負け、子供達が憧れていた軍人の権威は失墜します。又尊敬していた先生達は今迄教えていた教科書に墨を塗らせる。政治家も同様です。要するに人を尊敬し、この人の様に頑張ろうというカルチャーがなくなったとは言いませんが、戦後は少なくなりました。しかし、まだ日本の中にはこの人に学びたいという人は多くいます。松下、福沢、白洲の確固とした生き方の美しさもそうです。戦後の日本人でもモデルにしたい人間はたくさんいるのですから、もちろんアメリカ、ヨーロッパの良い所は学びながらも、自分達の身近にいるそういった人を学ぶ事が大切であろうと思います。白洲次郎を知る事によって兵庫県三田市の人を誇りを得ているように、或は福沢をしっかり学ぶ事により、日本人としての心を得て、又それぞれの郷土にいる優れた人を掘り起こすといった事が、町おこしにつながって行くように、日本人の心を思い出す事が大切であると思います。

私はこういう事を、東大の弁論部の部長であった時の大先輩で、四谷で喫茶店をしている大原さんという人から学びました。喫茶店主ですが、本当にすばらしい方で、人から学ぶ事の大切さを教わり、彼の生き方、考え方等、本を読む以上の影響を受けました。ですから今日は是非人から学ぶ事の素晴らしさを語りたかったのです。